

名古屋文化情報

2025
Winter

No. 412
NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery / K.Art Studio

随想 / 美術作家 石場文子さん

この人と... / 愛知県芸術劇場芸術監督・常務理事 唐津絵理さん

視点 / 奇想の演出家・天野天街のいた時代

#zoom up / ピアニスト 務川慧悟さん



2025

Winter

表紙

「猫をかぶってみたものの」

(2023年／陶に鉛筆デッサン、ラッカー)

やきものは僕の変身願望を満たす素材の一つです。素焼きした自分のライフマスクに、鉛筆で猫を素描しました。他人との関わりの中で、つつい良い子を取り繕ってしまっても本質が滲み出てしまう、どうしようもない経験から。



Contents

Pick Up Gallery K.Art Studio	2
随想 美術作家 石場文子さん	3
この人と… 愛知県芸術劇場芸術監督・常務理事	
唐津絵理さん	4
視点 奇想の演出家・天野天街のいた時代	8
#zoom up ピアニスト 務川慧悟さん	10

「なごや文化情報」編集委員

杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
 桐山健一 (舞踊・演劇ジャーナリスト)
 黒田杏子 (ON READING)
 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
 濱津清仁 (指揮者)
 望月勝美 (編集者・ライター)

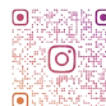
なかだ 中田ナオト

2022年 73 中田ナオト 松藤孝一(瀬戸市新世紀工芸館展示棟／愛知県)
 2022年 ホモ・ファールベルの断片 一人とものづくりの未来ー (愛知県陶磁美術館／愛知県)
 2022年 BIWAKOビエンナーレ(沖島漁協組合作業場／滋賀県)
 2023年 個展「PARTY PARTY」(織部亭・ゆうとび庵／愛知県)
 2024年 Scenery 景色とつながる4つのメソッド (古川美術館分館 爲三郎記念館／愛知県)

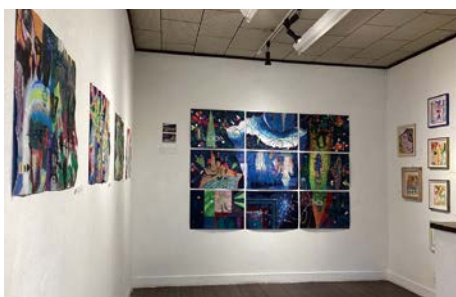
ウェブサイト

https://www.instagram.com/naoto_nakada/

Instagram QR



Pick Up Gallery



丹下敬文「拙島ーみかつきじま」展より
 2024年6月13日～30日

K.Art Studio (ケー・アート スタジオ)

K.Art Studioは、民家をリノベーションしたアートショップ併設の現代美術ギャラリーです。1995年に前身のK.ArtMarketが名古屋市南区に設立された時から数えて2025年に設立30周年を迎えます。これまで名古屋のオルタナティブスペースのパイオニアとして活動してきました。中部圏を中心とした作家の作品発表の場として、デジタル・アナログ両方の長所を活かして実際に会える、実物が手に入る独自のアートマーケットをこれからも維持・展開・発信していきたいと思っています。作家同士・作家とお客様等、いただいたご縁を大切にアートを通したコミュニティの形成にも力を入れています。

設立 1995年 支配人・代表 加藤慶
 住所 〒457-0014 名古屋市南区呼続二丁目4-5
 電話 052-821-2298

取り扱い作家 タナカえん、澤口聖、丹下敬文、足立ゆかり、森大地、藤井秋人、岩田憲和、三科琢美 ほか
 ウェブサイト <https://www.k-artmarket.com>

随想

33とこれから



美術作家

いし ば あや こ
石場文子

2016年、愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程修了。2024年「2,3,4(and 1 / or 1)」(堀川新文化ビルヂング)、2019年「あいちトリエンナーレ2019」(愛知県美術館)にて展示。2022年、名古屋市文化振興事業団第38回芸術創造賞を受賞。

私は1991年生まれ、今年(2024年)で33歳になる。先日仕事の関係で、初めて三十三応現身像の話を伺った。「三十三応現身像を簡単に説明すると『観音菩薩が衆生を救済する際に33の姿に変えて現れる』というもので、そこから33年というのが一つの周期として考えられている。33年の間に観音様にどこかで会っているんですよ」と説明を受けた。三十三回忌もこの教えからきているらしい。たまたま自分の33歳の誕生日の翌日だったこともあり、その考えで言うと私はようやく一つの周期が終わるのかと、自分の年齢と時間についてしみじみ考えた。

歳を重ねることへの感じ取り方は世代によって大きく異なる。自分の両親たちの世代は20代で結婚出産を経験した人が今よりも多く、女性の年齢がクリスマスケーキに例えられていた話も知っている。私の世代はその世代に比べたら年齢を重ねることに対する抵抗は少ない方だと思うが、それでも実際に20代が終わることに焦りを感じている友人も少なくなかったし、30歳で感じた開放感から自分の中にも20代と30代の壁を勝手に感じていたのかと、“20代の呪い”があったことを自覚もした。でも、実際30歳になると、とても生きやすくなった。年齢を聞かれて30歳と答えると、「若い」とかこれからのことを聞いてくる人が減ったし、自分自身が30年生きてきた実績があるおかげで、多少のことでは動揺しなくなった。良いか悪いか、自分のダメな部分も20代の時よりは受け入れやすくなった。

数年前、勤め先だった大学の卒業式で、女性の教授が卒業生たちに向けて「これから年齢を重ねると、どんどん楽しくなる。30代、40代、私はとても楽しかった。だから、みなさんもこれからどんどん歳を重ねて、自分の人生を歩んでほしい」と卒業生に贈った言葉が今も印象に残っている。私が美術を続けている理由の一つは、かっこいい人生の先輩たちにたくさん出会えたからだ。美術を続けていると、上記の教授や還暦を過ぎても活躍されている方、反対に一般社会では生きていけなさそうなダメ人間といわれる人など多くの人と出会えた。若い頃に無茶をしすぎてクレジットカードが作れないと教えてくれた教授や、美術館で大きな展示をしていた先輩が、お金がなく最近まで苦しんだという話を聞くと、私はまだまだこれからなんだ、大丈夫だと励ましてもらった。私自身、あまり大きな声では言えないけれど消費者金融にお世話になったこともあるし、ギャラリーに作品代を数十万円ぼったくられて逃げられた経験もある。私はしんどい時こそ人生の先輩たちの失敗談を思い出して踏ん張ってこられた。もし私より若い読者がいるなら、私の失敗や不幸話でよければいつでも聞いてほしい。みんな失敗して今があると思ったら少しは前を向けるかもしれない。それに、辛いことがあっても年齢を重ねていくことは楽しいと先輩方も言っているので大丈夫。まだまだこれからだ。私も来年の34歳からは、2周目として人生を楽しみながら歩んでいこうと思う。

この人と...



撮影：南部辰雄

愛知県芸術劇場芸術監督（アーティスティックディレクター）・常務理事

からつえり
唐津絵理さん

30年余、舞台芸術の創造と振興に奮闘

日本初の舞踊学芸員として国内外のダンスの変遷を最前線で体感してきた。実験的な逸品から国際共同制作の話題作まで、30年余のプロデュース・招聘作品は約300を数える。「ダンスに止まらない芸術の創造と振興・支援施策のあり方両面に影響を与える重要な取り組みを牽引してきた」として令和4年度芸術選奨文部科学大臣賞も受賞。時代の感性と協調するダンスの魅力と、地域文化の発展や国際文化交流の拠点となる劇場の役割を聞いた。（聞き手：桐山健一）

高校では新体操、優等生のマドンナ

感情を自然に表現できる踊りが大好きで、「5歳からモダンダンスを習い、お誕生日会で自作の踊りを発表したり、友人に振付して一緒に踊ったり…」。



モダンダンスを始めた頃の唐津さん

幼少期から熊本市内で過ごし、小・中学生の頃はバレエ、フィギュアスケート、器械体操、演劇と活動の幅を広げたが、高校では新体操ひと筋に情熱を注いだ。元NHKアナウンサーの武田真一さんは同級生で、月刊誌の企画に、「唐津さんは学園のマドンナで優等生」と書いている。

仕事の原点は強烈な「観る」体験

「一貫して興味があるのは身体表現や舞台に関わることでしたね。大学入試ガイドブックで『舞踊教育学科』の文

字を見つけ、『ここしかない』と、お茶の水女子大学を志望しました」。大学生や大学院生時代には、舞踊論や舞踊美学などを学ぶ傍ら、月1本のペースで舞台に出演し、ダンス公演を鑑賞しまくった。「木佐貫邦子の舞台に感動し、感性や知的好奇心に訴えかけるピナ・バウシュやウィリアム・フォーサイスの作品にダンスの価値観や見方を変えられました。この時期の強烈な『観る』体験が、舞台芸術に関わってきた私の仕事の原点です」。

大学1年生の時
東京の公演で踊る唐津さん大学時代の舞踊学科の仲間たちと
(後列右から2人目)

大学院生の時、仲間と一緒にアメリカでのフェスティバルに出演。「無名の私たちに1週間の公演は全て満席。通りすがりの若者や老夫妻も立ち寄ってくれました。舞踊の文化や環境の違いにカルチャーショックを受け、帰国後に

『舞台を多くの人に広めていく仕事』について調べ始めました。そんな折、指導教官から紹介されたのが、新しく開館する愛知芸術文化センターにできる愛知県文化情報センターの学芸員の求人。オープニング企画が山海塾の舞踏公演で『ダンスに詳しい人材が必要』と聞いて興味がわきました。愛知に縁はなかったが、「公務員試験を受けて採用され、文化情報センターに所属しながら1年かけて学芸員資格を取得。1993年に正式に日本初の舞踏学芸員になりました」という。

「観客の身体が目覚める作品」提供が目標

「『観客の身体が目覚める作品』の提供を目標に、世界の最先端のリアルな舞台芸術を様々な切り口で見せることと、新たなプロデュース作品の企画制作。この2本柱に取り組んできました。大切なのは、物事を常に俯瞰的かつ客観的に見ることに。バランス感覚はもちろん、必要な時には思い切れる大胆さも。制作には緻密さが求められますが、思い切ったこともできないと斬新な作品は生まれません」。プロデュースした200以上の作品は愛着の深いものばかりだが、あえて代表的な作品を問うと一。

「愛知芸術文化センター開館10周年に、文化情報センターが企画制作したH・アール・カオスのダンス公演『カルミナ・ブラーナ』（2002年）は衝撃的でした。フルオーケストラの演奏やソロ歌手、合唱の迫力に加え、大ホールの多面舞台の機能を活用した美術も見事で、『これは新しいオペラだ』と思える素晴らしい総合舞台芸術作品になりました」。この公演が「ダンス、演劇、音楽、美術、照明、映像、衣裳など様々なジャンルのアーティストが対等に能力を競い、協働し合う『ダンスオペラ』シリーズにつながりました」。



H・アール・カオスとオーケストラによる『カルミナ・ブラーナ』（大ホール）
撮影：南部辰雄

話題のダンスオペラは「愛・地球博」でも

愛知万博「愛・地球博」のために制作した『UZME』（2005年）はバレエ界の至宝ファルフ・ルジマトフやH・アール・カオスの白河直子らが共演した。



愛知芸術文化センター製作ダンスオペラ『UZME』
撮影：瀬戸秀美

オペラ歌手とダンサーが一つの役を歌い踊り、能楽師も出演した『青ひげ城の扉』（2005年）、名古屋市出身の気鋭ダンサー平山素子や個性派ダンサーの西島千博、山崎広太、女優の嵯谷友子が共演した『ハムレット〜幻鏡のオフィーリア』（2007年）…。話題作が



愛知芸術文化センター製作ダンスオペラ『ハムレット〜幻鏡のオフィーリア』の舞台
（右上が平山素子）
撮影：南部辰雄

続出し、「ダンスオペラ」は舞台関係者やファンの間で語り草になった。

「愛知万博と言えば、振付家・ダンサーの近藤良平率いるコンドルズや特別編成のプロミュージシャン、県内の小・中・高校生たちによる『森の中のパレード2005』は会場が熱気に包まれる楽しいパフォーマンスでした」。愛知県蟹江市の小学校では、ダンサーの伊藤キムやジャズピアニストの山下洋輔らを招いて『跳ぶ教室』（2002年）を開催。「公募の小学生52人や地域の大人たちが夏休みの2週間にわたりパフォーマンス作りを楽しみました」。発表日には噂を聞きつけた関東や関西からの来場者も含め700人もが集まった。

斬新な発想・企画の意欲作が評判呼ぶ

西洋のダンスの歴史を考察するシリーズ「ダンスの系譜学」は、「振付の原点」として古典を、次いで「振付の継承／再構築」として同じダンサーが新作を踊るユニークな企画。3人の女性ダンサー安藤洋子、酒井はな、中村恩恵にフォーカスしたプロジェクトだ。酒井が踊った『「瀕死の白鳥」／「瀕死の白鳥 その死の真相」』（2021年）は「バレエの様式を解体し、現代のパフォーミングアーツの新たな局面を切り開いた意欲作になりました」という。



愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama「ダンスの系譜学」より酒井はな『「瀕死の白鳥」／「瀕死の白鳥 その死の真相」』
撮影：羽鳥直志



「ダンスの系譜学」の初演時のグループ写真

ジャンルも方法論も異なるダンサーの島地保武とラッパーの環ROYが踊りと言葉の起源を辿って紡いだ『ありか』（2016年）は、固定観念を揺さぶりながら挑んだ新しいスタイルのライブパフォーマンスとして人気を呼んだ。『あいちダンス・フェスティバル／ダンス・クロニクル（舞踊年代記）～それぞれの白鳥～』（2004年）は、地元のバレエ団の交流とバレエの歴史を辿るという興味深い企画だった。

『Rain』（2023年）は「サマセット・モームの短編小説『雨』を題材に現代美術作家の大巻伸嗣やサウンドアーティストのevalaらがコラボレーションしたダンス作品。主役に名古屋ゆかりのバレエダンサー米沢唯を選抜した直後にコロナ・パンデミックが発生しました。『雨』は感染症の流行から起こる物語ですから、創作のリアリティーが生まれたと思います」。

トリエンナーレではダンスの「居場所」作る

「あいちトリエンナーレ」では、2010年から2016年までキュレーター（パフォーミングアーツ）を務め、「時代を象徴するアーティストの紹介や新しいアーティストの発掘で事業全体の中にコンテンポラリーダンスの『居場所』を作りました」。イスラエル・ガルバンやアニマル・レリジョンらを日本に初めて招き、奥三河地方に伝わる「花祭」をモチーフにした山田うん振付の新作『いきのね』（2016年）などの話題作も初演。

「ローザスの『ローザス・ダンス・ローザス』（2010年）はとりわけ印象に残る作品です。学芸員2年目の職場研修で東京での制作過程に直に触れ、上演ごとに観客の感動の渦が広がり、口コミで観客がどんどん



初来日公演のイスラエル・ガルバンとのツーショット（2016年10月）

増えて最後は行列までできるのを目撃して『日本にコンテンポラリーダンスが芽吹く瞬間に立ち会うことができた』と思った作品の再演だったのですから」と感慨深げだ。

Dance Base Yokohama (DaBY)でも活躍、芸術選奨文部科学大臣賞受賞

公共劇場のプロデューサーとして地域文化に貢献してきて「アーティストたちが腰を据えて創作に打ち込める場を」との願いが形になったのが、2020年に設立された民間支援による新しいダンスハウス「Dance Base Yokohama（愛称DaBY）」（横浜市）だ。芸術家たちの自立的な創作活動の支援や安全安心な創作環境の整備を目標に立ち上げ

から参加し、アーティスティックディレクターとして活躍している。音楽家や美術作家、デザイナーら多彩な人材を迎えての交流拠点となることを目指しているのも特徴。一連の活動が評価され、DaBYは「メセナアワード2023」で「メセナ大賞」も受賞している。

「公共と民間の両方の組織に柔軟に対応していただいて実現できました。小さな改革の扉は開かれたのです」。連携の成果が「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohamaパフォーミングアーツ・セレクション2022」の



令和4年度
芸術選奨文部科学大臣賞贈呈式

全国ツアーだ。ダンスの多様性を示して高く評価された唐津さんは、令和4年度の芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興）を受賞した。「贈賞理由に『創客の視点から、舞台芸術の批評眼を持った新たな観客を生み出すことにも力を入れてきた。これらの活動は

芸術振興の意味や方法を改めて問い直す契機ともなった』とも書いていただきました。感激です」とも。

海外出張は2009年以来、コロナ禍の時を除いて年に3～5回。「欧米では、街の文化圏は劇場を中心に広がり、劇場や舞台芸術が普通の人々の生活の一部になっているようで、人々が舞台からあふれ出るエネルギーを浴びて元気になり、生きていく喜びや活力を実感しておられる気がします。だから今の仕事に、観客とアーティストをつなぐ使命感を強く感じ、名作の誕生に立ち会える喜びに心躍ります」とほほ笑む。

職員出身の芸術監督誕生

愛知県に骨を埋めるつもりで情熱を注ぎ、数々の成果を上げてきたことが評価されて、2024年4月に愛知県芸術劇場芸術監督に就任した。「芸術監督にはアーティストが選ばれることが多く、一職員の就任は日本初では？」と驚きました。

地域の劇場に長く勤めてきた職員は様々な事情を知っており、物事がスムーズに運ぶ面は多々あると思います。コーディネー



新作の打ち合わせ（2023年12月）

ター的な役割に関してはプロデューサー出身者が適任と考えている人も多いようです」。そして「この劇場で30年余も育ててもらった恩返しをしなければ、と深く心に刻んでいます」ときっぱり。



ダンサー達のリハーサルを見守る
Dapheny Chen Creation
©Joseph Marcinsky

愛知発の秀作が相次ぎ海外進出

「風通しの良い健全な環境で創った作品を愛知県芸術劇場の優れた舞台施設で初演し、日本全国の様々な公立劇場と組んで再演を重ねることで作品を練り上げたい。次のステップとして、海外での上演。愛知県で創作した作品が世界に発信されれば、県民の皆さんにとって『わが都市は文化的なのだ』と誇りになり、劇場への愛着が強まると確信しています。海外へのネットワークづくりに一層積極的に取り組みます」。これまでに、『「瀕死の白鳥」一』は国内で22公演を重ね、「2024年5月のアメリカツアーにはプロデューサーとして同行しましたが、3都市公演とも大好評。世界で最も大きな舞台芸術の図書館の『リンカーンセンター・ライブラリー』からは『上演作品の記録映像を所蔵したい』と依頼されました」。『Rain』は東京や福岡のほか香港でも上演。『あしか』は現在も国内外で30回以上の上演を続けており、2020年にはコロナ禍に悩まされながらもフランス公演も実現した。

名古屋市芸術創造センターとの連携も

今後の課題として、「創客が重要と考えています。ただ観客を集めるだけではなく、批評眼をもって作品を見てくれる観客が増えれば、アーティスト側に緊張感が生まれ、要望に応える質の高い作品の創造に励み、文化レベルが上がっていきます」。ホールが3つある愛知県芸術劇場では「ダンスのプログラムとしては大まかに、大ホールは完成度の高い作品の上演や全国展開できる海外カンパニーの招聘公演、コンサートホールは音楽とのコラボレーション作品、小ホールはアーティストと観客が緊密な関係を作れる実験的・先鋭的な作品、と区別化しています。中ホールがないため、作品によっては名古屋市文化振興事業団が運営する名古屋市芸術創造センターとの連携も進めています」。芸術創造センターでは2025年3月、国際共同制作に参加した作・演出の岡田利規と作曲の藤倉大が演劇と音楽の対等な関係性で創作した現代音楽劇『リビングルームのメタモルフォーシス』（2023年オーストリア初演）が上演される。

ハードル低く、気軽に楽しめる環境づくり

劇場や作品へのハードルを低くするため、子どもが少々騒いでも構わないリラックスパフォーマンスや、障がいのある人も気軽に足を運べる公演、小・中・高校生の無料招待などとともに、「公共スペースでの無料イベントを増やすなど、多彩な作品と身近に触れてもらえる環境づくりも進めていきます」。さらに、2025年以降には「先鋭的な活動を応援し、新たなアーティストを発掘するため、斬新な舞台作品の公募も考えています」と語る。

これまでも一部の公演では、事前にパンフレットを一部公開したり、公演後にオンラインで感想をシェアするトークイベントを開催したり、と作品をより深く理解してもらう機会を作ってきた。アーティストによるプレトークや「鑑賞レビュー



芸術監督クロストーク（左が唐津さん）（2024年7月）

講座」の開催なども一層充実したいという。唐津さん自身の「X（旧Twitter）」などでの発信も、「作品やアーティスト、劇場や舞台芸術環境、私の問題意識などの話題を皆様と共有できたらもっと楽しんでいただけたらと思うからです」。

劇場を「新しい世界」への「窓」にしたい

劇場は「新しい世界を見せてくれる場所、『すごかった』と驚きの体感ができる場所です。知性や想像力が鍛えられ、固定観念が覆される場でも、社会的役割から解放されて本来の自分自身に戻れる場でもあります。自分を見つめ直し、心の救いを求め、心の拠り所となる機能も持っています。私も仕事を離れば一人の主婦で母親。舞台鑑賞で気分転換したり、新しい自分を発見したり…。舞台というレンズを通して見えてくる自身の心を大切にほしい。劇場を『新しい世界』への窓にするのが使命だと思います」と力説する。

そして、「大学入試の面接で『舞踊大学を作りたい』と言いました。今は、教育機関と劇場が一体化した『ダンスのための専門施設』の設立を夢見ています」。

（文中のアーティストは敬称略）

奇想の演出家・ 天野天街のいた時代

2024年7月7日、演出家・劇作家の天野天街^{あまの てんがい}が、肺がんのため64歳で彼岸へと旅立った。主宰する〈少年王者館〉の第40回本公演『それいゆ』初日を4日後に控えてのことだった。劇団を旗揚げした20代の初めから、劇作や演出、映像、映画、イラストレーション、コラージュ、文章など、多岐にわたる創作活動で異才ぶりを発揮。名古屋を拠点に幅広く活動していた天野及び〈少年王者館〉は全国各地にファンを有し、名古屋で開幕後、東京、京都、高知と続いた『それいゆ』にも多数の観客が詰めかけ、その死を悼んだ。多くの人に愛された奇想の演出家・天野天街の足跡と功績を振り返る。
(まとめ：望月勝美)

天性の表現者・天野天街のルーツ

1960年、愛知県一宮市で生を受けた天野は、幼少の一時期、父が貸本屋を営んでいた影響もあって早くから数多の本や漫画に触れ、稲垣足穂、つげ義春、水木しげるなどの作品に親しんだ。やがて、カルトの人気を誇った「月刊漫画ガロ」（日本初の青年漫画雑誌として'64年に創刊）に傾倒。中でも鈴木翁二の作品世界や感性に共鳴し、'98年には『マッチ一本ノ話』、'04年には『こくう物語』の同名漫画を原作として作・演出を担い舞台化もしている。



天野天街さん

小学校の頃から級長を務める人気者であった天野は、本名の英則とは別に、創作物などで既に“天街”（天外、天涯など表記のバリエーションはさまざま）を名乗るなど、この頃から生涯にわたる趣味趣向が定まりはじめ、表現者としての資質も発揮しはじめる。高校時代には映像作品も手掛けるようになり、「天体嗜好症」などの8mm映画を撮影。その才能は、'94年に「愛知芸術文化センター」のオリジナル映像作品として初監督し、2つの国際映画祭でグランプリに輝いたサイレント短編映画『トワイライツ』の快挙（※1）へと繋がる。



『トワイライツ』のワンシーンより

撮影：羽鳥直志

※1 少年トウヤが、死の瞬間から過去・現在・未来の郷愁を採取して幻の地図を巡る、スラップスティック調ロードムービー。「第41回ドイツ・オーバーハウゼン国際短編映画祭」及び「第44回メルボルン国際映画祭短編部門」で、共に日本人として初めてグランプリを受賞した。

もともと「演劇は大嫌いだった」というが、大学時代、別の大学に進学した高校の同級生の誘いを受け、公演チラシと舞台美術の製作を手伝うことに。そこで「ついでに役者も」と請われて出演を引き受けるも、初舞台で何も出来なかった悔しさが原動力となり、演劇を続けることになったとか。台本も同様に、周りの人間に勤められるまま書き始め、上手くないから「次こそは!」という想いで40年以上続けてきたという。

唯一無二の“アマノ式エンゲキ”の作り方

嫌いだったはずの演劇について、天野はかつてインタビューでこう語っている。「中から見ると演劇にはものすごく伸びしろがある。なんとなく、映画のようなものを創りたいという気持ちでやっていたのですが、【演劇】というライブであり総合芸術…光や音などを総合的に使って何かひとつのものを成り立たせることに可能性を感じました」

'82年に〈少年王者館〉を結成し（当時は〈劇団少年王者〉）、当初は劇作・演出ともに数人が入れ替わり担当していたが、徐々に天野一人がその役割を担うように。そうした流れと上記のような意欲から演劇活動に邁進し始めた天野は、「ある（いる）」ことと「ない（いない）」ことを最大の主題として、「生と死」「あなたとあたし」など、すべてのものを等価に見据えた独自の視点による台本を書き、特異な演出法を編み出していく。

例えばその1つに、前の役者のセリフの語尾と次の役者のセリフの語頭を同じ音にして台本を書き、役者に同時発声させる“重ね”がある。やりたいことはあっても物語を描くことには興味のない天野が、役者のセリフを書くため“しりとり”の要領で言葉を繋いでいったことで、独特のリズムや多様な効果を生んだ演出法だ。

他にも、時間が前後したように感じさせる暗転や明転の使い方、自動人形のような動きが特徴的なダンス、さらに、プロジェクションマッピングの先駆けであり、虚実を曖昧にすることで不思議な効果を生んだ映像演出や、何時とも何処とも知れない光景でありつつ、なぜか郷愁をそそられる舞台美術、天野の細かな要求に応じて制作された数々の劇伴（音楽）、オリジナル衣裳、大量の小道具などが渾然一体となり、優れたスタッフの発想や多大な力も得ながら、他に類を見ない演出と劇空間を確立していった。

常に探し求めた、新しいアイデア

劇団内外の作品に関わらず、劇作や演出を手がける際に天野は、題材となる対象や周辺を納得がいくまで調べ尽くした。知識や情報を詰め込んだ先に、“無意識レベルで立ち現れてくる何か”を重視し、「何の関係もないように見えたものが、一瞬にしてすべてが繋がる瞬間がある」とも。そうした事象と、役者一人ひとりの身体、スタッフの協力によるテクニカルで高度な試みが合わさることで生まれる、煌めく刹那に芝居の醍醐味を見出していたように思う。

作品のネタ探しや表現方法の探究にも貪欲で、気になるこ

とや芝居に使えるような発想が浮かぶと、すぐに書き留めていた姿も印象的だ。友人・知人はもとより、初めて出会った人とも酒の力を借りながらよく語り合い、雑誌に余念がなく、演出のヒントになり得るマジックの類いにも強い関心を示し、情報収集にかける熱意と知識欲は衰えることがなかった。

公演前の取材の度に聞いた「誰も見たことのないものを創りたい」という欲求は、劇団とは別に立ち上げた〈KUDAN Project〉(※2)の発足以降、より顕著になっていったように思う。それまで手がけてきた大所帯の劇団作品とは異なる、二人芝居という新たな制約の中で最大限できることを探りはじめ、海外公演も始まったことから自分たちとは異なる言語を使う観客にも面白さを届けるべく、驚くようなことがしたい、という幼心のような純粋な欲求と、演出家としての矜持がより高まっていったのかもしれない。



『百人芝居◎真夜中の弥次さん喜多さん』 '05年8月上演／愛知県勤労会館 撮影：山崎のりあき



KUDAN Project『くだんの件』 '16年11月上演／伊丹AI・HALL会館 撮影：山崎のりあき

※2 天野が作・演出を務め、小熊ヒデジ、じつなしとるの二人芝居を上演する目的で'98年に発足したユニット。これまで『くだんの件』『真夜中の弥次さん喜多さん』（原作：しりあがり寿）『美藝公』（原作：筒井康隆）を上演。再演も幾度となく行われている。'05年には、出演者約170名、スタッフも含めると総勢300名以上が参加した『百人芝居◎真夜中の弥次さん喜多さん』も上演した。

多様な世代、多彩なアーティストたちと交流

演劇を通して天野は、さまざまな年代や多岐にわたるジャンルのアーティストたちとも盛んに交流した。

演劇界では例えば、生涯唯一の“師匠”と慕った松本雄吉（'16年に逝去。主宰していた〈維新派〉は'17年解散）とは、ホームグラウンドであった「セツ寺共同スタジオ」の周年記念企画で2度の大規模な合同野外公演を行い、'13年と'16年には松本が上演台本と演出を担当したパルコプロデュース『レミング～世界の涯まで連れてって～』（原作：寺山修司）で、共同台本及び一部演出も担うタッグを組んだ。'23年には、憧れの存在であり、奇しくも同じ年に鬼籍に入った唐十郎の戯曲『少女仮面』を人形劇化。〈糸あやつり人形一糸座〉による公演で演出を担当した。また、流山児祥率いる〈流山児★事務所〉からは毎年のように依頼を受け、長年にわたり多くの作品の演出や映像監督などを務めた。

当地で同時代に活躍した演劇人とは、北村想の戯曲『最後の淋しい猫』（初演は北村自身の演出で'81年上演）を'96年に演出。同年代の佃典彦とは、'00年に『極楽鳥には足がない』で佃が戯曲、天野が演出を手掛け、同年～翌年にかけては、同い年のはせひろいち率いる〈劇団ジャブジャブサーキット〉と合同公演『8月の南瓜と12月の西瓜とケンタウリ～憂（ナフ）の思い出～』（作：はせ／演出：天野）を行った。長年の盟友でもあった佃、はせとは、役者として出演した別作品で共演な

どもしている。

また、天野を慕う年下の演劇人たちとのコラボレーション企画の予定も幾つかあり、構想段階のものから、具体的に上演準備が進んでいるものもあった。

さらに、十代の頃からファンだったというあがた森魚や、'80年代後半から交流が続くたまなどのミュージシャンをはじめ、漫画家や作家、映画監督など多彩なジャンルの多くのアーティストたちとも交遊し、創作活動を共にすることも多かった。

奇想天外で緻密極まりない、再現不可能なアマノワールド



『それいゆ』チラシ。モチーフを切り貼りするアナログ手法によって独自の感性で制作されたコラージュがベースになっている。〈少年王者館〉の多くの公演チラシのほか、外部からのオファーも絶えず、数多くの作品を手掛けた。



天野の生前最期の公演作品となった『それいゆ』（'24年7月～8月、名古屋・東京・京都・高知で上演）。'92年の初演当時、約4年の休養期間を経て発表された本作は、天野演出の要素やアイデアがぎっしりと詰め込まれた代表作のひとつ。撮影：山崎のりあき

天野の書く台本は、いわゆる「戯曲」とは様相が大きく異なっている。特徴的な筆跡で大学ノートに手書きされ、役者のセリフや動き、ト書きのみならず、前述の“重ね”部分を示す文字を囲んだ丸印、シーンごとの役者の出ハケや配置図、照明や音楽、音響、映像の指示やきっかけ、舞台セットや小道具のイラストなどがぎっしりと書き込まれ、初見で全体を理解することは難しい。

自ら「コレは戯曲ではなく、或るジクウカンの設計図である」と明言しているのは、自身が台本執筆に追われて稽古に参加できない時も読めばわかるよう、必要に迫られて編み出した、苦肉の策の特殊台本だからだ。慣れた役者やスタッフは、この“設計図”により天野の不在時でも稽古を進める術を身につけているが、それだけで作品が完成することはない。

ゼロコンマ数秒単位の僅かなズレも良しとしない、鋭すぎるほどの感覚で指示する演出家本人の全体調整によって役者の発声が変わり、動きや間合いが締まり、醸し出される空気や気配が変化し、心地よいリズムが生まれ、シーンが輝きだす。また、ひとたび幕が開いてもなお、高みを目指して細かな修正やシーンの追加などが日々重ねられていく。そうした微に入り細を穿つ感性こそが天野演出の真骨頂であり、それが出来るのは天野本人しかいないからだ。

そういう意味に於いて真の天野作品を観ることはもう叶わず、天野天街がいた時代が終焉を迎えてしまったことは本当に残念でならないが、天野自身もそうであったように、優れた先人たちの創作に触発され、影響を受けながらも独自の道を切り拓いてゆく、そんな新たな才能の活躍も楽しみにしたい。

#zoom up

ズーム・アップ

ピアニスト

むかわけいご

務川慧悟さん



撮影：Yuji Ueno

2019年にロン・ティボー・クレスパン国際コンクールで第2位を受賞し、2024年には第33回出光音楽賞を受賞するなど、日本のみならずヨーロッパでも大活躍の務川慧悟さん。本誌No.392（2020年5・6月号）にて注目の若手音楽家のお一人として紹介したが、今回は務川さんの音楽観や今後の展望などを伺った。（聞き手：濱津清仁）

幼少期からの演奏活動

1993年、愛知県東海市に生まれ、その後、知多郡東浦町に移り住んだ務川さん。3歳からピアノを始め、小学4年生の時に名古屋芸術大学音楽学部主催「第1回 小・中・高校生の為のピアノコンチェルト」にて筆者と共演したのが演奏活動のはじまりであった。この時は、モーツァルト作曲のピアノ協奏



幼少期の務川さん



名古屋芸術大学音楽学部主催
第1回 小・中・高校生の為のピアノコンチェルト（2005年）

曲 第12番イ長調KV.414第1楽章を演奏した。聴衆だけでなく、共演したオーケストラのメンバーからも評判が良かったことが思い出される。筆者も将来、才能を発揮するのではないかと期待していた。その後、しばらくはヤマハ音楽教室でレッスンを受けながら、自作の曲を演奏するなど技術を磨き、愛知県立旭丘高等学校、東京藝術大学へと進学する。

2012年には第81回日本音楽コンクールで第1位を受賞し、セントラル愛知交響楽団と共演した受賞記念コンサートにてチャイコフスキー作曲のピアノ協奏曲第2番を演奏するなど、本格的な演奏活動を開始した。



コンサートの招待状

東京からパリへ

東京藝術大学を経て、2014年にパリ国立高等音楽院を審査員満場一致の首席で合格して渡仏する。最初は「3年ぐらいで学位を取って帰ろう」と考えていた。現在パリ在住10年目になるが、始めの5年間はほぼ研鑽を積むのがメインであった。しかし大きな転機となったのは、2019年のロン・ティボー・クレスパン国際コンクールにて第2位を受賞したことであった。これがきっかけとなり、フランスで演奏活動を続けたいという思いが強くなったという。その後コロナ禍になり半年ほどは日本で過ごすことになったが、2021年には世界三大コンクールの一つである、エリザベート王妃国際音楽コンクールにて第3位を受賞。さらにフランス語圏での繋がりができたことで、演奏活動の可能性が広がり、活躍する機会が増えた。

留学のきっかけは「パリという街が魅力的だったから」ということだが、その後フランク・ブラレイ氏と上田晴子氏に



ロン・ティボー・クレспан国際コンクール（2019年）

師事することになる。「先生の教え方などが自分にはぴったりに合っていました」と衝撃的な出会いについて話す様子が非常に印象的であった。とはいえ、師の教えは、これまで培ってきた弾き方などを全てリセットし、一からやり直すことを意味していた。幼少期からピアノを弾いてきた分、弾けていると思い込んでいたと気付かされたことに加えて、言葉の壁や、慣れないパリでの生活など苦労が重なり落ち込んだ。しかし、パリに住み始めて5年が経つ頃には、日本からパリへ着くと「パリに帰って来た」と、パリが自分のホームグラウンドだと感じられるようになったと語る。



師匠であるフランク・ブラレイ氏（右）と上田晴子氏（左）

務川さんの音楽観

すでにルービンシュタイン、リパッティなどの名ピアニストによる録音作品が数ある中で、自分がピアノを弾く意味があるのだろうかと思問した務川さん。「シューベルトなどの作品の中には、自分ではメッセージ性が汲みとれないものもありますが、幼少期から弾いてきたショパンやラヴェルに関しては、この曲は絶対にこういうメッセージを持っていると自信をもって言えます」と語る。勿論、技術的な部分で乗り越えなければいけない障壁はある。務川さんは続けて「ショパン作曲のバラード 第4番などは、技術的な要素ではなく表現的な部分で難しいと言われますが、自分は難しいと思ったことはありません。ショパンが伝えたいだろうメッセージを思い描きながら、確信を持って弾いています」とのこと。

それは幼少期から数々のレッスンを受け、様々な演奏家と出会い、パリでの生活を通して得た現地の文化や風習・言語、建物や街並みなどの空間から感じる雰囲気・空気感から、作者のメッセージをどうピアノで再現するかを培ってきた蓄積の上にある。「プロとして演奏することに一定の自信はもっています」と語る務川さんからは、穏やかではあるが確かな誇りが感じられた。

また、務川さんは積極的にラヴェル作品を採り上げており「ラヴェルピアノ作品全曲演奏」をテーマにしたリサイタルを2017年、シャネル・ピグマリオン・デイズにおいて開催した。2022年にはNOVA Recordより「ラヴェル：ピアノ作品全集」をリリースし、その誇りがすでに実績により裏付けされている。



ラヴェル：ピアノ作品全集（2022年）

これからの展望

今後やりたいことはいろいろあり悩むものの、大きくは2つあるという。

「1つ目は、アーティストとしてパリに住むことです。アーティストとして住むということは、ビザを取得して住むことを意味します。日本で自分のすべきことも多いですが、ヨーロッパでどれだけのことができるか精一杯、挑戦していきたいと思っています。日本とパリとフィフティ・フィフティで活動したいと考えています」

「2つ目は、室内楽の魅力を広めることです。パリに来てからの5年間で、室内楽にたくさん取り組みました。上質な室内楽を楽しむ空気がパリにはあり、聴衆も演奏会の数も多いので、さらにそれを広げていきたいと思います」とも話す。実際、務川さんのスケジュールには2025～2026年にかけて室内楽の演奏会も多く予定されている。2024年10月には、パリにてフォーレのヴァイオリンソナタを演奏するなど、これからもこの分野での活動を広げていきたいということが表れている。

今後の活動

今後の演奏会の詳細については「務川慧悟 KEIGO MUKAWA OFFICIAL SITE」(<https://keigomukawa.com>)で見ることができる。X（旧 Twitter）でも、務川さんの活動をリアルタイムで追うことができる。

筆者もたびたび拝見しているが「イタリアからパリに帰って来た」という表現は、パリを拠点に活躍されているのを強く感じた言葉であった。今後の務川さんの活躍が非常に楽しみで、目が離せない。

■務川慧悟 Keigo MUKAWA(@keigoop32)
<https://x.com/keigoop32>

THE WIZARD OF OZ

By L. Frank Baum
With Music and Lyrics by Harold Arlen and E. Y. Harburg
Background Music by Herbert Stothart
Dance and Vocal Arrangements by Peter Hawcutt
Orchestration by Larry Wilson
Adapted by John Kane for the Royal Shakespeare Company
Based upon the Classic Motion Picture owned by
Turner Entertainment Co. and distributed in all media by Warner Bros.

THE WIZARD OF OZ is presented by permission of The Music Corporation on behalf of
Concord Theatricals, New York, City. www.concordtheatricals.com

名古屋市文化振興事業団 2025 年企画公演

名古屋市文化基金事業

ミュージカル

オズの魔法使い

2025 年 2 月 14 日 (金)・15 日 (土)・16 日 (日)

※開場は各回 45 分前 13:30・18:30・11:30・16:30 11:30・16:30

名古屋市青少年文化センター・アートピアホール

入場料<全指定席>

S 席 (1 階) 4,000 円 友の会・障がい者等・大学生 (25 歳) 以下 3,600 円

A 席 (2 階) 3,000 円 友の会・障がい者等・大学生 (25 歳) 以下 2,700 円

名古屋市文化振興事業団チケットガイド

052-249-9387 (平日 9:00~17:00/郵送可)

名古屋市文化振興事業団が管理する文化施設窓口 (土日祝日も営業)

※工事休館等がありますので、ウェブサイトでご確認ください。

電子チケット



虹の彼方に
仲間と歩き出そう！
なりたい自分への大冒険へ！

原作 / フランク・ボーム 作詞 / E.Y. ハーバーク 作曲 / ハロルド・アーレン

上演台本・演出 / 横山清崇 音楽監督・指揮 / 石崎真弥奈 振付 / 山崎末友季

管弦楽 / エメラルドシティ管弦楽団

ミュージカル「オズの魔法使い」は競輪の補助を受けて実施します。

「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、メールフォーム、FAXまたは郵送にて2025年2月21日(金)
【必着】までにお送りください。ご回答いただいた方の中から抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼントいたします。

※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階

(公財)名古屋市文化振興事業団 文化情報アンケート係

FAX: (052) 249-9386 Email: tomo@bunka758.or.jp

1. 内容についてどう思われますか。

①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない

2. 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)

①表紙 ②Pick Up Gallery ③随想 ④この人と... ⑤視点 ⑥zoom up

⑦1年をふりかえって(Spring号のみ掲載)

3. 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。

4. 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題やコーナーがありましたら、ご記入ください。

5. ご回答いただいた方の ①お名前 ②年代(30代など) ③郵便番号 ④ご住所 ⑤電話番号

6. ご感想などは事業団ウェブサイトや定期刊行物などに

掲載させていただく場合があります。

掲載してよろしいですか。①はい ②いいえ

7. (「はい」と回答された方のみ)

掲載をペンネームにする場合はご記入ください。

メールフォームで
簡単回答！
QRコードからアクセス



頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー

アートディレクター

印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和 2-9-12 <https://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE

感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK

舞台音響・映像設備

設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する

株式会社 エアンドブイ

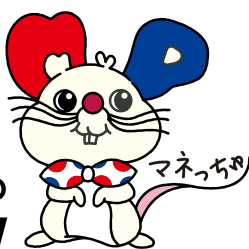
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98

TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ


〒461-0004 名古屋市中区葵2-11-22 アバンテッジ葵ビル301

TEL: (052) 508-5095

FAX: (052) 508-5097

Web: www.mane-pro.comE-mail: mane-pro@mane-pro.com